

40歳特集 「心の定年」乗り越える／ジェジュンが語る

A E R A  
ほぼ日刊イトイ新聞

40歳は、惑う。

〔大特集〕ほぼ日×アエラ プロジェクト

A E R A



昭和63年6月10日第3種郵便物認可  
2014年11月3日発行  
毎週月曜日発行(10月27日発売)  
通巻1478号

14.11.3  
No.48  
定価 390円

アエラ



## ワーママの肖像

第2回

# 夫も変わつた

週末は家族で出勤。平日の保育園のお迎えは「最後っ子」。いつも一緒にいてあげられる母親にはなれないけど、そのぶん娘にできることは惜しみたくない。服にかけた情熱を胸に、毎日懸命に走る。

「早くしなさい」は言わない

一般的なワーキングマザーにとって、週末は、平日に注げない分の愛情もたっぷり子どもに注げるチャンスだろう。みんなの場合、仕事柄、週末に依頼が集中することも少なくない。

夫も変わつた

「できるだけ親子の時間、家族3人で過ごす時間を作りたい」

夫がドライバーを引き受けて車を出しお、家族全員で仕事先に向かうのが週末の定番になった。みなみが客先で仕事をしている間、夫と娘は遊園地やデパ地下でデート。移動中の車内は、貴重な親子3人の時間だ。

「不器用だから、私ができることには妥協せず全力を注ぎたいんです」

パーソナルスタイルリストのみなみ佳菜(42)の会話の中には、「全力」という言葉がよく登場する。

一般的の個人を対象にした服装のコンサルティングを専門とし、新規予約は2~3ヶ月待ちという売れっ子。大手商社に勤める3歳年下の夫、37歳で出産した4歳の娘の3人暮らしだ。自宅のリビングは、仕事道具の服を吊るしたラックやトルソー、事務作業用のパソコンに交じって、愛娘「りいちゃん」のために仕立てたドレスや家族写真が飾られ、「ワーク・ライフ・ミックス」の生活空間になつていている。

一般的なワーキングマザーにとって、週末は、平日に注げない分の愛情もたっぷり子どもに注げるチャンスだろう。みんなの場合、仕事柄、週末に依頼が集中することも少なくない。

平日もほぼ毎日顧客の自宅に出向く。クローゼットの中身を診断して、手持ちの服で可能なコーディネートを提案。「体形が変わつて着られなくなつた」という服には針を打つてサイズ調整をして、「足に合う靴がない」と悩みを聞けば、専門家を紹介して相談にも立ち会う。その間、メディアの連載や企業研修の打ち合わせもこなす。

そして、19時に間に合うように保育園に滑り込む。保育園は契約農場の食材を使った給食を昼夕2回提供するとこを選んだ。夫は毎日帰宅が0時を

なかなか家に帰ろうとしない。でも、みなみは決して「早くしなさい!」とは言わないようしている。

「私は毎日キャロットケーキを焼いてあげられるような母親にはなれない。一緒にいられる時間が少ないからこそ、私が娘にできることは惜しみたくない。それが『待つ』ということなら、気が済むまで待つてあげたい」

## 「世界で一番大事な宝物」寝る前に言葉にする

家に着いたら、寝るまで「べつたりとひつついで過ごす。「りいちゃんは世界で一番大事な宝物」と言葉にして寝かせる。寝息が聞こえたら、起き出して翌日の仕事の準備を整え、朝食用のスープを煮込み、パンを準備する。ただし、その朝食を娘と食べる役割は夫。夫にとって、朝は愛娘との貴重な触れ合いの時間。

「私が手を出すとペースを乱してしまふので、私は保育園に向かう2人を見送るだけ。平日の育児は『朝は夫、夜は私』と自然と決まつきました」だが、夫婦関係が「うまくいかない時期も長かった」と語る。出産後にパーソナルスタイルリストとしての活動を始めた頃は、「君はもうママなんだよ」「なぜそこまでするの?」と夫はみんなの姿勢に反対だった。

「理解を得られるようになつたのは、



あなたにとって  
子どもとは?

×  
あなたにとって  
仕事とは?  
尽きることなく情熱を注げるもの

寶物

私が腹を決めて本気で打ち込む姿を見せてから。中途半端だと、家族にも伝わらないと気づいたんです。夫が友人に『妻が仕事に対して徹底的にこだわるところを尊敬している』と言つていったと知った時はうれしかったですね』

大学を卒業して、大手アパレルブランドの販売に携わって以来、服に関する知識を積んで20年。販売時代は常に店舗内売り上げトップを維持し、20代でヘッドハンタされ、エリアマネジャーも務めた。服が好き。人が好き。靴下1足を買ってもらつた時に、相談に45分付き合い、同僚に呆れられたこともある。「買わせるのではなく、本当にその人が輝く服を提案したい」という強い思いが常にあつた。

みなみにとって仕事は「どこまでも尽くせるもの」。それが言葉だけではないことは、みなみが5年前からコミュニケーションスキルの指導者として慕う、心に響く話し方代表取締役の宮北結(きゆく)がよく知っている。

「6人グループで自己紹介するのも涙目だったのに、今は150人以上を前に堂々と講演する。彼女は自分の弱みから逃げずに向き合う強さがあるから、周囲の信頼も得られるのでしよう。『服の力を届けたい』というプレーンな信念がある」

みなみの原点は幼少期にある。香川でコーヒー店を営んでいた両親が6歳の時に離婚。みなみを引き取つてから。中途半端だと、家族にも伝わらないと気づいたんです。夫が友人に『妻が仕事に対して徹底的にこだわるところを尊敬している』と言つていったと知った時はうれしかったですね』



#### ■みなみ・かな

- 1972年 香川県高松市出身。地元の高校を卒業する。
- 94年 帝京大学卒業後、米アウトドアブランド、エディー・パウアー・ジャパン入社。原宿店に配属となり、25歳で最年少店長に。
- 2001年 米ラグジュアリーブランドBCBGMAXAZRIAに移り、日本エリアマネジャーに就任。販売員教育や店舗運営指導を担当する。
- 05年 イカジュアルブランドMAX&Co.のマネジャー職に。
- 06年 商社勤務の夫と結婚。
- 07年 ファッションレスキーに入社。政近準子氏に師事し、パーソナルスタイリングの活動を始める。
- 10年 妊娠・出産を経て、独立。「装いのチカラ」をコンセプトにしたスタイリングオフィス「KOROR(コロール)」を立ち上げる。

た母は新しく店を開き忙しく、徐々に家に帰らなくなつた。次第に折檻(せっかん)も始まつた。「食事代」として時々テーブルに置かれる数千円で、みなみはパンを買わずに服を買うようになつた。

「あんた、赤い服が似合うやん」

服を介した会話だけが、母との甘い思い出だつたからかもしれない。

#### 8歳のときにはすごい力がある

学校帰り、デパートの屋上で遊んでいた。友達には迎えに来る親がいるのに、みなみにはいない。本来はひよきんなのに不安からふざきがちになり、友達も離れていた。そんなみなみを変えたのは、一枚の服だった。

「忘れもない、黄色と白のボーダーのTシャツです。くすんだ色の服ばかり着ていたのをやめて、元気が出そうな色合いのTシャツを着たら、それだけ友達の顔が変わつた。その日から友達と一緒に話せるようになつて、自分を取り戻せた。服にはすごい力があ



パーソナル stylist  
みなみ佳菜さん(42)

個人向けのスタイリストとして首都圏を中心にお活動。企業向けの研修・講演なども行う。最近は、女性管理職向けの服装指導の依頼も

ると確信しました』

みなみが8歳の頃の出来事だ。その後、みなみは父に引き取られ、平穏な生活を取り戻した。服の魅力にとりつかれた少女は、授業中はノートにアパレルブランドの名前やコーディネートのプランを書き、中学生の頃には同級生の服を選んでいた。1杯300円のコーヒーを毎日400杯いれ続ける父を、「職人」として尊敬している。

みなみにとって娘のりいちゃんは、『全力で走る私の姿を見てもらう存在』だという。だから、一緒にいられる時間はできるだけ捻出する。顧客が許せば子連れで仕事に向かう日もあるし、週に1回習うコーラスのレッスンは親子で参加する。多くの大人に触れながら育つてほしいと思っている。

周囲にも頼る。娘の同級生家族における世話になり、月に6回は「仕事と子育てを両立する家庭の生活を学びたい」という大学生を受け入れ、娘と遊んでもらう。学生を紹介するスリール代表の堀江敦子も、みなみの親子関係を近くで見てきた。

「親子というより、1対1の人間同士としてリスペクトし合つて。りいちゃんの一番の自慢はママ。仕事を妥協せず、自分自身の人生を生きているみなみさんを、学生も慕っています」

鎌倉の大仏を背景に撮つた親子写真を見せてくれた。週末の仕事の合間に15分だけ立ち寄つた場所。何十倍もの時間を凝縮したような笑顔が溢れてい